中原　泉
一枚の写真③

Ⅰ　周 汝川理事長との出会い

1964年（昭和39年）の春，６年生だった私は，薬理学の真泉平治教授室へ呼ばれた。真泉教授の隣には，痩身ながら，見るからに精悍なエネルギッシュな人が座っていた。真泉先生の同級生で，本学第29回卒の台湾出身の周 汝川（じょせん）先生と紹介された。４年前の1960年（昭和35年），周先生は故郷の台中市に中山牙医専科学校を創立した。新聞部であった私は，同校の創設談を取材せよと命じられた。

私が問うまもなく，周先生は，両手を振り回し口角泡を飛ばして，まるで機関銃のように捲し立てた。のちに，メディアは田中角栄元首相をコンピューター付ブルドーザーと渾名したが，そのときの周先生は，まさにスリムなコンピューター付ブルドーザーであった。口八丁手八丁の脂の乗った40代。私は，その爆発的なエネルギーに圧倒された。それが，周理事長との鮮烈な出会いであった。

本学は，1971年（昭和46年），同校と姉妹校を提携した。中原 實学長と周理事長の間柄だったので，気やすく口頭で済ませたらしい。本学最初の国際姉妹校である。

私は1989年（平成元年）に，小倉英夫助教授を同行して，初めて中山医学院を訪問した。まだ，創立時の趣きを残したキャンパスであった。構内をツアー中，周先生はガラリと授業中の教室の戸をあけた。私たちを学生たちに紹介したあと，私に挨拶せよと促した。私は面食らいながら，即席で中山医学院と日本歯科大学の関係を説いた。

写真の私の隣，汝川先生の実弟の周 汝南先生（本学第33回卒）が通訳した。汝川先生は，教壇を歩き回りながら，黒板に私のいう人名や地名を書きなぐる。汝南先生は，実兄とは対照的に温厚柔和な紳士で，亡くなるまで永らく汝川先生を支えた。

（写真撮影：小倉英夫<当時>助教授）

Ⅱ　50周年を迎えた中山医学大学

当時，台湾には軍医学校に牙医学科があるのみであった。中山牙医専科学校は，台湾で２校目の歯学部，最初の私立歯学部であった。昭和15年に本学を卒業した周先生は，晩年の中原市五郎校長の薫陶をうけた。台中市に開業したが，中原 實学長に啓発されて，43歳にして歯科医学校を興す。

創立７年後には早くも医学部を併設し，それから次々に４学部を増設し，中山医学院となる。1999年(平成11年)にメディカル・センター(医学中心大樓)を新築した。地上17階，地下５階，500床を有する総合病院である。これによって中山医学院は，アジア随一の医学系総合大学に躍りでた。今や学生総数8,000名，卒業生総数32,000名で，歯学部卒業生は台湾歯科医師の40％を占める。

写真は，同センターの開院式のテープカット。中央の周理事長の左は台中市長（中山医学院歯学部卒），右は私。そのあとロビーの式典において，私は，中原 實学長のリトグラフ『猫の子』を贈呈し，日本の招き猫の謂れを披露した。

話は飛ぶが，あるとき町のエレベーターが故障した。そのなかに周理事長が閉じこめられたと，テレビが駈けつけ全国に放映された。斯く周先生は，台湾有数の著名人なのである。

中山医学大学となった同校は，2010年（平成22年）11月，創立50周年を迎えた。周先生は94歳，かくしゃくとして中国語と日本語で朗々と挨拶した。あの火を吹くようなエネルギーは，半世紀後の今も衰えを知らない。祝宴では，料理を自前の鼻毛鋏で細かく切り刻んでから，悠々と口に運ぶ。切りにくい肉や好みでない菜は，隣席の私や小倉教授の皿にサッサと移す。毎朝，日本の新聞を読みNHKの番組を観る。一代で大業を為し遂げた周先生は，第二の故郷日本と母校日本歯科大学を決して忘れない。

（写真撮影：小倉英夫教授）